

ら必ず点けて消してを繰り返す。そして音や臭い・光といったことや、肌触り・空気といったことに対する感覚の敏感さなどを特徴に持っています。

じっとしているのが苦手で、不注意で待つということができない、せっかちな衝動性を示す子どもたち、これが7歳ぐらゐまでにいたるところで認められる場合、ADHD、注意欠陥多動性障害といます。運動面の不器用さや協調運動がつかない場合、これを発達性協調運動障害と呼びます。全体的な知的発達の遅れがないにも関わらず、読めない・書けない・計算ができないといった学習のスキルにつまずきのある場合、これを学習障害と呼びます。

また、身体的・心理的・性的な虐待、ネグレクト、あるいはドメスティックバイオレンスの目撃。こういったことが子どもの発達に何らかの影響を及ぼすものと考えられ、今まで述べたような、発達の障害と呼べるようなものに類似した行動パターンを示すということも言われています。

次に正しい理解に基づいて、後押し支援、そして今日のテーマである「とぎれのない支援」をするにはどんなことが必要かということになりますが、保育、教育の現場、あるいは親御さんは皆さん孤軍奮闘、一生懸命に頑張っていますがなかなかいい評価に結びつかない。バッシングよりも、労いと評価、励ましが大事であると思います。それと同時に、軽度発達障害に対する正しい情報と対応策が同時に提示される必要があります。3歳から10歳までの間に、周囲が支え、褒め、認められることで自尊感情を育てることが大事なのは、すべての子どもたちに共通しますが、この時期にバッシング、低い評価を受けるのが、軽度

発達障害のある意味での宿命的なテーマになっています。学習障害のある子どもたちが、「漢字なんて100回書いたら書けるようになる。なぜ努力をしない」と先生に叱られていることは、よくあることです。子どもも先生も悪いのではなく、学習障害という存在に気づけなかつただけなのですが、そのことで受ける子どもの傷は大きいです。多くの子どもたちは「僕はバカだ」といいます。子どもたちには「君には君の学び方がある」ということ、なにより「君は君としてかけがえのない存在」ということをはっきり強調していかなければならないのです。そのためには正しい診断を早い段階でできることが大切です。しかし、現実問題としては、この早い診断・早期の発見というのはとても難しい。技術的に難しいという部分と、もう一つは親御さんの思いです。親御さんは、我が子の障害を知った時、ショックを受け動揺します。そしてそのことを否定したり、診断を伝えた者に対する怒りや悲しみを乗り越え、「どうしたらこの子と付き合えるのだろうか?」と、向き合うことができるのです。支援する側は、親御さんの気持ちにどれだけ敏感かということが、そしてこの親御さんが苦悩する期間は、援助者の熱意や情熱で縮まるということはないということも知って頂けたらなと思います。そして私たちが寄り添って伴走することに疲れた時に、専門家は親や対象者に対して、「障害受容が・・・」と言います。もしこの言葉がつい口から漏れた時は、支援する関係に自分自身が途方に暮れたとき、疲れ切っている時だなど自分自身のメンタルヘルスのバロメーターにしています。

基本的な対応ですが、一つは本人がどこに困っているかを考え、本人の困り感に寄り添うという